

〔研究ノート〕

写真を活用した保育の振り返りと 園内研修の手法の提案

—アクティブ・ラーニング型園内研修の1つとして—

瀧 川 光 治
Koji Takigawa

大阪総合保育大学
児童保育学部

要旨：本論考は、保育場面の子どもの様子や保育室環境などの写真を使ったアクティブ・ラーニング型の園内研修の手法を整理・考察し、保育の振り返りや園内研修において写真を活用することについての提案を目的としたものである。参加者のクラスの写真を使うことによって、参加者自身が自分の保育を振り返りながら、主体的・能動的な気づきや学び—とくに、子どもの理解や遊び理解、そして保育環境の理解—が促進されるだけでなく、職員同士の協同的な気づきや学びを引き出すことができ、ある場面の多様な捉え方が共有できることを示した。

キーワード：園内研修、保育の振り返り、アクティブ・ラーニング、写真

I 問題設定

1. はじめに

研究テーマとしての園内研修は、古くて新しいテーマである。保育の質の向上のために、これまで園内の子どもの姿が描き出された事例を使った園内研修や、エピソード記録・エピソード記述による園内研修、さらにビデオを使ったビデオ・カンファレンスなど様々な手法が提案され、実践がなされるだけでなく、保育者の変容なども研究テーマとされてきた。

筆者も10年余り前から、縁あって保育現場において個別の園での園内研修に携わるようになり、その間、「あるテーマの解説型（講義型）の研修」とともに、「ビデオ・カンファレンス型の研修」「保育現場の実践事例のエピソード記録等を用いた研修」なども経験してきた。とくに、ビデオ・カンファレンスやエピソード記録等を用いた研修においては、保育者が読み取ったり、語ったりしたことに対して、その場面の子どもの理解や遊び理解にとどまらず、その実践を幼稚園教育要領や保育所保育指針、子どもの発達などに関連付けて意味づけたりするような研修を意識して行ってきた。その中では個々の職員の気づきや学びはあっても、それらを職員間に広げたり、共有したりするのは、筆者の力不足のため不十分な状態であった。

エピソード記録や事例検討は、各保育者が書き留めて

おきたい子どもの姿や場面を文字記録として書き起こすことから始まる。どのような場面を切り取るかは、園内研修のテーマに沿った場面や、ある特定の子どもや子どもたちの行為に焦点を当てるなど、保育者の問題意識が投影される。また、文字記録として書き起こすことにより、その保育者が自分の保育を振り返り、子どもの姿や行為の意味を深く考えることにつながる。そして、それを用いて園内研修することで、自分の子ども理解や遊び理解、保育の構想の視点だけでなく、参加者からの多様な視点が得られることにより、保育者の力量形成に資する手法である。

また、ビデオを用いたカンファレンスは、その場面をエピソード記録として文字情報に書き起こして園内研修を進めることもあるが、参加者が一同に会する場で、ビデオをモニターやプロジェクターで映し、映像+音声の情報を一緒に見ることから園内研修を始めることができる。同じ場面を、複数の目で見ることにより、多様な読み取りや解釈をすることができる良さがある。エピソード記録や事例検討は、その記録・事例の書き手の解釈のもとに、参加者が検討をするが、ビデオではその出発点である解釈自体も参加者とともに構築していくことが可能であり、同じ場面を見た時の読み取りの多様な視点を踏まえた保育者の力量形成に資する手法である。

筆者自身、園内研修を重ねる中で、保育者の力量形成には、「自分の保育を語る」「特定の場面を語る」「それ

をエピソードなどの形で文字情報にする」だけでなく、いかに個々の保育者の読み取りや気づきを職員間で共有し、多様な視点を得ることが大事ではないかと考えるようになった。

そこで、2010年度以降は職員間の気づきや学びを広げたり、つないだりしながら、知の共同生成を行うために、付箋を使ったり、マインドマップを使ったり、グループ討議やグループワークなどの演習の要素を取り入れながら、参加者がより能動的に参画するようなアクティブ・ラーニング的な園内研修を意識的に行うようになってきた。

2. 「アクティブ・ラーニング型園内研修」への志向

アクティブ・ラーニング¹⁾とは、中教審(2012)の「質的転換答申」によると、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である」(下線引用者)とされている。そこで、本論考において「アクティブ・ラーニング型園内研修」とは、筆者の試論的定義づけとして、「講師(大学教員等)の一方向的な講演形式の園内研修ではなく、園の職員の主体的・能動的な学びや気づき、さらに職員同士の協同的な学びや気づきを促すようなグループ・ディスカッション、グループ・ワークやワークショップの要素を取り入れた園内研修」(下線引用者)をいう。

中央教育審議会教員養成部会(2015)が「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について(中間まとめ)」²⁾を出しているが、その中の「教員研修に関する改革の具体的な方向性」に、「研修実施体制の整備・充実」として「さらに、主体的・協働的な学びの要素をより一層含んだ、AL研修(アクティブ・ラーニング型研修)への転換を図るための研修手法の開発や改善、新たな課題に対応した研修プログラムの開発や研修の効果の適切な評価・改善を行うとともに、これらの研修手法やプログラムの全国的な普及を図るための措置を講じる必要がある」と示されている。すなわち、今後の教員研修の改革として「AL研修(アクティブ・ラーニング型研修)」の手法の開発が必要とされており、本論考は保育現場においてその一助となるものと考えられる。

3. 写真を活用した園内研修³⁾への志向

2013年度前半に、写真を活用した園内研修の方法等を知ることによって、2013年度後半の園内研修から「写真を活用する園内研修」に意図的に取り組み始めることとした。もちろん、それまでの園内研修でもエピソードなどとともに写真があり、その写真から読み取りを深めることもあったが、ここに言う「写真を活用する」とはエピソード等の文字記録なしで、各自各クラスの保育場面の写真を複数持ち寄り、その写真を中心として子どもの思いや保育環境の読み取りを深めていくという意味である。

筆者が写真を使った園内研修に取り組むようになったきっかけの1つは、Benesse次世代育成研究所『これからの幼児教育』(2013春号)の記事中の「写真を活用した園内研修」についての特集を読んだことである。その中で創発型の園内研修について提案している岡(2013)⁴⁾によると、「創発型研修のためには、写真を用いるのもよい方法」であり、「保育で印象に残ったり、よいと思った場面の写真を持ってきてもらい、なぜ選んだのかの理由を聞きます。すると撮影者によってさまざまな観点や理由が語られ、そこから保育観があぶりだされる」という。また、「写真は言葉になっていること以上の情報も他者に見えるのがよいところ」であるともいう。「撮影者の観点や理由、保育観」が園内研修で写真を使うことで出てくることの良さを説明している。すなわち、「自分の用意した写真について語る」ことを通して、自分の保育観・子ども観があぶり出され、それが他者に写真とともに伝わるという。まさに、AL型研修でいう「参加者の主体的・能動的な学びや気づき」が引き出されやすいということである。

さらに岡の指導を受けているせんりひじり幼稚園(2013)⁵⁾は、創発型の園内研修の具体的な方法として「写真と付箋紙を活用した研修で子どもの見方を広げる」ための方法を提案している。その第1ステップは「1枚の写真をもとに、子どもの気持ちを付箋紙に記入」し、「保育者それぞれが子どもの心のつぶやきを考え、付箋で“吹き出し”を作る。」それに続いて「吹き出しの内容とそう考えた理由をひとりずつ発表する」、そして第2ステップとして「他の保育者の意見から子どもの見方を広げる」ために、「全員の付箋紙の内容をグループ化して話し合う」「自分にはなかった子どもの見方にふれ、視野を広げる」といった園内研修に取り組んでいるという。

このように、保育場面の写真は「子どもの気持ち(内面)を読み取り、想像すること」「その理由を考えること」ができるツールであり、それを創発的な園内研修として行うことで「多様な見方(読み取り)」に気づいてい

くことができるツールであると考えられる。また、写真と付箋紙を活用することで、AL型研修という「職員同士の協同的な学びや気づき」が促されやすいということである。

その意味で、本論考で提案しようとしている「写真を活用した園内研修」は、エピソード記録・エピソード記述による園内研修のように事前に事例を文字情報に書き起こすプロセスが無く、その日の保育終了後すぐにでも園内研修として取り組める良さがある。また、ビデオを使ったビデオ・カンファレンスでは、ビデオの特定の場面に付箋を貼ることはできないが、写真であれば、写真1枚に複数の付箋を貼ることができ、「写真と付箋紙」を活用することでビデオとは違う良さがあると考えられる。

4. 本論考の目的

2014年度～15年度（本年度）にかけて、「AL型の園内研修」⁶⁾および「写真を活用した園内研修」を個別の園での園内研修だけでなく、複数の園からの参加者が集まるような研修（自治体や保育関係の職能団体の研修）でも具体的な手法を定式化して取り組むことによって、参加者の主体的・能動的な参加が可能な研修として機能することがわかってきた。

そこで、本論考においては、それらの実践を体系的に整理し、「写真を使ったアクティブ・ラーニング型の園内研修」の手法を整理し、保育の振り返りや園内研修において写真を活用することについての提案を目的としたものである。

ただし、本論考においては、写真を使うことに対する感想・意見、AL型研修に対する感想・意見、さらには参加者の変容などについてはほとんど触れられていない。それは、園内研修や自治体等の研修ではその日の研修全体（研修内容）の感想アンケートはあっても、筆者が自

覚的に「写真を使うこと」「AL型研修」の意義や「参加者の変容」についてのデータ収集を行っていなかったからである。そのため、あくまでも本論考は「手法の提案」に留めることとする。

また、子どもの写真や保育中の写真の活用にあたっては、子どもの肖像権や個人情報保護の観点から、園外・園内を問わず、保護者の承諾を得ることとともに、園長の承諾を得ることが必要である。また、園外の研修の場合、使用した写真は各自責任を持って持ち帰り、きちんと回収することが必要である。なお、本論考で使用している写真はそうように保護者および園の承諾を得たものである。

II 写真を使った保育の読み取りや振り返りとは？

1. 写真の読み取りの一例

ここで図1及び図2を使って、写真から読み取るといっても、どのようにするかということについて一例を示す。

図1のような子どもの姿を中心とした写真の場合、「①子どもの行動」「②子どもの思い（内面理解）」のほかに、「③子どもの心情・意欲・態度」「④5領域のねらい・内容との関連性」「⑤子どもの発達の読み取り」といった幼稚園教育要領や保育所保育指針、子どもの発達過程などの専門的な視点からも読み取りが可能である。たとえば、この図1の場合に当てはめると単純には、「①繰り返し小さな石を落とす行動」「②落として無くなることが面白い」「③落とすことが面白いからもっと落としたい」「④領域「環境」の“好奇心”、領域「人間関係」の“自分で行動する”」「⑤1歳頃から見られる探索行動、つまむなどの発達」などを読み取ることができる。もちろん、そこから読み取りを広げたり、深めたりすることが可能



図1 小さな石を穴に落とす
(1歳8か月)



図2 秋の自然素材を箱で区分けして入れる(5歳児クラス)

であり、読み取りもこれが唯一正しいのではなく、写真を撮影した以外の保育者であれば別の読み取りをする可能性もある。

図2のような保育環境を中心とした写真の場合、「①この保育環境への子どもの関わりの様子」「②保育者の環境構成のねらい（育てたいこと・経験してほしいこと）」等の読み取りが可能である。たとえば、この図2の場合に当てはめると単純には、「①自分たちで集めた物を区分けして入れる」「製作するときに選択して使う」といった行動が見られると想定され、「②大きさ・形・量・数を比べたり分類したりすることを通して、似ている・違うに気づいたり、ドングリの多様性に気付いてほしい」といった保育者の思いなどを読み取ることができる。

このように保育の読み取りのための子どもの写真とは、基本的に子どもが“ピース・サインをしている記念写真”ではなく、「子どもが何かに取り組んでいる写真」や「保育環境（物的環境・人的環境等）に関わっている写真」のように「子どもの行動」や「子どもの思い」を読み取れるような写真である必要がある。また、保育環境の写真は、図2ではクローズアップした写真であるが、保育室の全景を広角に撮影したものとセットで用意することで、保育室の中におけるその保育環境（場・コーナー）の位置づけも検討することができる。

2. 保育場面の子どもや保育環境の写真から読み取るために

写真はデジタルカメラで撮影したものをを用いる。保育中に撮影した子どもの遊びや活動の様子、楽しそうな表情や真剣なまなざしを捉えた写真であったり、手元がクローズアップされて、どのようにしているかをしっかり把握することもできる写真もある。また、保育後に子どもたちがその日作ったものの写真や、ままごとコーナーなどの保育環境を撮影した写真も用いることもある。撮影の角度やタイミングなどを微妙に変えて、同じ場面や保育環境を複数の写真で捉えるということもあり得る。

事例やエピソードといった文字情報による記録は、何に着眼して文字記録として残すかという視点や記録者の記述力によって有益な情報ともなれば、そうでないこともある。写真の場合も同じように、撮影者の視点やタイミングによって、一連の流れのある場面の一部分を切り取るので、読み取りや振り返りに有益な写真として使うことができるものもあれば、そうでない場合もある。それは単にピントが合っていない、ブレてしまっているということではなく、「子どもの行動や思いを読み取りにくい写真」「保育環境の意図性が読み取りにくい写真」があるのも事実である。

そのため、子どもの写真は次のような視点で捉えられたものがよい。

- ① 子どもの表情が横顔でもいいので写っている写真（泣いている、笑っている、嬉々としている、集中している、真剣なまなざしになっているなど）
- ② 子どもが取り組んでいる様子がわかる写真（たとえば、真剣に製作に取り組んでいるときには手元や姿勢が写っていたり、イヤなときに全身でのけぞっている写真など）
- ③ 他児との関係がわかる写真（そばに誰もいなくて一人なのか、平行遊び的に他児がそばにいるのか、他児と一緒に取り組んでいるのかがわかるなど）

3. 子ども理解を深めるために

- (1) 「子どもが安心している・情緒の安定が現れている写真」「子どもの笑顔や楽しそうな様子の写真」「個々の子どもの育ちに着眼した写真」を使う

保育を進めていく基盤としての「情緒の安定」「楽しそうな様子」「子どもの育ち」を捉えるため保育者の目（視点・まなざし）を深めることが、子ども理解の出発点になるであろうが、それを育成していく手段の1つとして「そのような視点で写真を撮り、その写真を元に振り返る」ことが考えられる。

たとえば、4月新入園の子どもたちは、笑顔いっぱいというよりも、不安な気持ちが表情に現れていたりする。保育者にとって養護（情緒の安定）を基盤に保育を進めていくための手がかりとして、「子どもが安心している・情緒の安定が現れている写真」を撮るように心がけると、個々の子どもの心情面の理解につながると考えられる。また、個々の子どもの情緒的に安心・安定ができる場や人的環境としての保育者の役割を考える一助になると思われる。もちろん、写真を撮るよりも子どものそばにいたり、抱っこやおんぶをするなどが必要なケースが多々あるが、とくに分離不安の大きな子どもや新しい環境になじみにくい子どもが、安心して情緒が安定している場面を意識的に捉えること、その瞬間の写真を撮影し、保護者に見てもらうことにより、保護者の不安感も安心感に変わる可能性がある。

また、保育者が子どもの姿や育ちを肯定的に見るためには、子どもの笑顔や楽しそうな様子を捉えるような保育者の目（視点・まなざし）が必要である。そのため、日々の保育の中で、笑顔や楽しそうな様子の写真を撮る経験を積み重ねることによって、子どもの姿や育ちを肯定的に見られるようになってくることが期待できるであろう。

さらに、3歳未満児の保育や支援を必要とする子ども

の場合は、個人記録や個別計画が必要であるが、文字・文章で記録に残すだけではなく、子どもの育ちがよく現れている（読み取りやすい）写真を記録として残し、振り返ることによって、その子の育ちを点から線へとつないで理解することにつながるであろう。

（2）「子どもの夢中・没頭に着目した写真」「子どもの気づき・試そうとする姿の写真」を使う

子ども理解を深めるための2つ目として、個々の子どもが遊びや活動の中で、夢中になり、没頭している様子を捉えたり、子どもの気づきや試そうとする姿を捉える保育者の目が考えられる。そのため、その瞬間を捉えた写真を撮り、その写真を元に振り返ることが考えられる。また、子どもの学びや気づきなどを読み取るには、このような写真が読み取りやすい。

（3）「子どもの人間関係の育ちに着目した写真」を使う

子ども理解を深めるための3つ目として、子どもの人間関係の育ちを捉える保育者の目が考えられる。そのため、そのような写真を元に振り返ることが考えられる。

たとえば、1人でもくもくと取り組んでいる場面や、2～3人で顔を寄せ合っている場面、協力しあいながら遊びを進めている場面など人間関係に着目した写真などを使うことで、読み取りがしやすい。

4. 子どもの遊びや活動の理解や保育の構想・環境づくりに生かす

（1）子どもの遊びの理解につながる写真

たとえば、各クラスでのごっこ遊びの展開や、各学年での発達の違いを理解しようとするとき、ごっこ遊び場面の写真が複数あると、発達の違いや遊びの変化を比較検討しやすい。保育者にとって、個々の子どもの理解や集団の人間関係の理解だけではなく、ある遊びや活動の理解を深めるためには、その遊びや活動自体を定点観測するように複数の写真の比較検討を通すことによって深まると考えられる。

（2）保育環境づくり（保育環境の改善）につながる写真

保育環境づくりや改善は、多くの保育現場で悩みの種として上げられている。そこで、写真を使って、その保育環境の実態を捉えなおすことが、その後の保育環境の改善につながる。

Ⅲ 写真を使ったアクティブ・ラーニング園内研修の手法の提案

ここでは、「参加者の主体的・能動的な学びや気づき」「職員同士の協同的な学びや気づき」が促されるような「写真を使ったアクティブ・ラーニング型の園内研修」の

手法の提案を行う。以下に示した手法は、すべて個別の園内研修で実施したことがあるものであり、手法1・2については、自治体などの複数園が集まる研修で実施したことがあるものである。

1. 園内研修の手法1－自身の保育を語り合う

〈目的〉 写真を使って自分の保育を語ることに慣れる。

〈所要時間〉 60分程度

〈用意するもの〉 1人あたり3～4枚程度の写真を用意する。

〈手順〉

- ① 「なぜその写真を選んだのか？」を考える。
- ② 写真に写っている子どもの姿・様子について、「何をしているところか？」「なぜその写真を選んだのか？」を中心に、1人3分程度で説明しあう。
- ③ 「そのときの子どもの思いや内面に感じていることは何か？」について「心情面」「意欲・思い・めあて」「思考・認知的側面」の観点から考えてみる。
 ＊心情面：楽しい、嬉しい、面白い、心地よい、不安、誰かそばに居てほしいなど
 ＊意欲・思い・めあて：もっとやりたい（もう1回！）、こうやってみよう！
 こうしてみたらおもしろいかも！ こんなふうにしてみたい！など
 ＊思考・認知面：どうしてかな？ どうしたらいいかな？など
- ④ ③について、1人3分くらいずつ語り合う。
- ⑤ 20分くらい時間をかけて、互いに感じたことを伝え合う。
- ⑥ 《研修の振り返り》 写真を使って語ることを通して感じたことや、それぞれの写真を使って意見交換したことで気づいたことや、感じたことは何かについて語り合う。

この手法についてはのべ20回以上実施したが、初任の保育者であっても「写真があることにより、自分の保育について語りやすい」という意見が複数あった。他方、③の「心情面」「意欲・思い・めあて」「思考・認知的側面」の観点からの読み取りは、経験年数が数年でもある方が語りやすい傾向があるが、初任者であっても、「心情面」「意欲・思い・めあて」は読み取ることが可能である。

2. 園内研修の手法2—子どもの内面の読み取りを深める（その1）

〈目的〉 ・写真を使って子どもの内面の読み取りに慣れる。

・子どもの内面の読み取りの多様性に触れる

〈所要時間〉 60分程度

〈用意するもの〉 1人あたり3～4枚程度の写真と、付箋20～30枚程度を用意する。

〈手順〉

① 自分の用意した写真に「タイトル」を考えて付箋に書く。

1枚の写真に「ほくひとりでやるの!」「みて!高くなってきたでしょ。」など子どもの内面や、その場面のポイントがわかりやすいタイトルをつける。それを付箋に書いて写真に貼る。

② 「なぜそのタイトルにしたのか?」「子どもの姿・様子は何をしているところか?」について1人3分程度で語り合う。

③ 参加者同士で写真を交換して、別の視点から別のタイトルを考えて、付箋に書いて貼っていく。

＊ 参加者が5人の場合、1枚の写真につき5枚の付箋がつくようにする（1枚はその写真の持ち主がつけたタイトルの付箋、4枚の付箋は残り4人の参加者のつけたタイトルの付箋）。

④ 20分くらい時間をかけて、互いに感じたことを伝え合う。

⑤ 《研修の振り返り》 写真に「タイトル（ネーミング）」をつけたり、他の人のタイトルを見たり、意見交換したことで気づいたことや、感じたことは何かについて語り合う。

（注）グループサイズが大きくなると意見交換などしにくくなるので、グループサイズは4～5人で進めた方がよい。

この手法についてはのべ10回以上実施したが、写真に「タイトル」をつけるのは、初めてのときには難しいと感じるようである。しかし、③の交流をしていくと、複数メンバーの「タイトル」を見ることで、わりにスムーズに出てくる。また、多くの場合、写真のタイトルは、子どもの内面（とくに子どもの思い）を表したものが出てくる傾向がある。

3. 園内研修の手法3—子どもの内面の読み取りを深める（その2）

〈目的〉 ・写真を使って子どもの内面の読み取りに慣れる。

・遊びや活動の中の一連の子どもの姿を1つのストーリーとして語る。

〈所要時間〉 60分程度

〈用意するもの〉 1人あたり3～4枚程度の写真と、付箋20～30枚程度を用意する。

＊ ここで使う写真は、子ども達の一連の遊びや活動の様子がわかる写真を用意する。たとえば、ままごとコーナーで遊んでいる写真の場合、1枚だけではなく、その遊びの始まりの頃、しばらく経った後、さらにしばらく経った後、そして、終わりの方の写真のように時間経過がわかる連続性のある写真を用意する。

＊ このやり方は、写真を使った4コマ漫画のようなもので、一連の流れのある場面を1つのストーリー（物語）としてつないで語ることになる。

〈手順〉

① 一連の場面を表す全体の「タイトル」を考えて、「だんだん高くなってきた～」など子どもの内面や、その一連の流れのポイントがわかりやすいタイトルをつけて、1枚の付箋に書く。

② 次に写真1枚1枚に付箋を使って、子どもの内面（心のつぶやき）を想像して書く。実際にそのときに話していた言葉があれば、それも書き留め、その言葉の裏側にある子どもの内面も読み取って一緒に書く。

③ ①②で考えたことについて、「なぜそのタイトルにしたのか?」「各写真でなぜその心のつぶやきを考えたのか?」などを1人3～4分程度で語り合う。

④ 20分くらい時間をかけて、互いに感じたことを伝え合う。

⑤ 《研修の振り返り》 この研修を通して、気づいたことや、感じたことは何かについて語り合う。

（注1）グループサイズが大きくなると意見交換などしにくくなるので、グループサイズは4～5人で進めた方がよい。

（注2）このやり方で、用意する写真を「ある子どもの4月の姿、5月の姿、6月の姿、7月の姿」というように、1カ月ごとの写真を用意して読み取ることで、1学期のその子の育ちを1つのストーリー（物語）としてつないで語ることもなる。

この手法については、手法1・2を経験した園の先生方を対象に、のべ10回以上実施したが、写真を選ぶのが難しいという声がある。写真を撮る際、ある場面を1～2枚程度写真に撮っていることはたびたびあるが、連続4枚となると難しいという。そこで、手法1・2の経験者にいきなり、手法3でやるというよりも、まずは次回への予告として「4コマ漫画のように連続した写真を意識して撮ってみてください」ということを伝えておくと、スムーズである。また、4枚並べて、4コマ漫画のように1つのストーリーとして語ることで、1枚の写真よりも子どもの思いやめあての変化に着目した話を語りやすくなるケースが多い。

4. 園内研修の手法4—5領域と結びつける

〈目的〉 写真を使って子どもの内面の読み取りと5領域を結びつけて理解を深める

〈所要時間〉 60分程度

〈用意するもの〉 ・1人あたり3～4枚程度の写真と、付箋20～30枚程度を用意する。

・幼稚園教育要領、保育所保育指針、認定こども園教育・保育要領

* この研修は、5領域の「目標」「観点」「ねらい」「内容」に出てくる言葉（キーワード）に関連付けながら実施する。

〈手順〉

- ① まずは「園内研修の手法2」の①②と同じ流れで写真の読み取りと交流を行う。
- ② それぞれの写真は、5領域のどの領域に関係ありそうかを考えてみる。具体的には、1枚の付箋に、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」のどの領域に当てはまるかを書く。複数の領域に当てはまりそうなら、複数の領域を書く。また、理由も簡単に書く。
- ③ 「園内研修の手法2」の③と同様に、参加者同士で、写真を交換して、別の視点から別の「タイトル」や「領域」を考えて、付箋に書いて貼っていく。
- ④ 20分くらい時間をかけて、互いに感じたことを伝え合う。
- ⑤ 《研修の振り返り》写真に「タイトル（ネーミング）」をつけたり、「領域」に当てはめて考えてみたり、意見交換したことで気づいたことや、感じたことは何かについて語り合う。

（注）グループサイズが大きくなると意見交換などし

にくくなるので、グループサイズは4～5人で進めた方がよい。

この手法についてものべ10回以上実施したが、写真を5領域の「目標」「観点」「ねらい」「内容」に出てくる言葉（キーワード）に関連付けながら読み取るというのは、最初は難しいようである。最初は、要領や指針の5領域の部分のページをあちこち見ながらなので、読み取りに時間がかかる。しかし、何度かこの手法を実施すると、この写真は領域「環境」の「好奇心」というキーワードに当てはまるし、領域「表現」の「いろいろな素材に触れて」という部分に当てはまるという読み取りのスムーズさと深さが出てくる。

1つの写真で1つの領域のキーワードが当てはまるのではなく、複数の領域のキーワードが当てはまることに気づき、領域の相互性・総合性についての理解も深まっていく。

5. 園内研修の手法5—保育環境の持つ意味を考える

〈目的〉 ・写真を使って子どもの内面の読み取りを踏まえて、保育環境の持つ意味を考える。

〈所要時間〉 60分程度

〈用意するもの〉 ・1人あたり3～4枚程度の写真と、付箋20～30枚程度を用意する。

・幼稚園教育要領、保育所保育指針、認定こども園教育・保育要領

* この研修は、保育環境の持つ意味を考えるので、子どもの様子がわかるだけでなく、どのような保育環境かがわかる写真を用意する。

〈手順〉

- ① まずは「園内研修の手法2」の①②と同じ流れで写真の読み取りと交流を行う。
- ② 写真に写っている「保育環境」を見て、子どもにとって、この遊びや活動の保育環境（遊具、場、コーナー・・・）は、どういう環境・場・コーナーかを考える。「(子どもにとって) ○○の環境」「○○の場」というように「環境のネーミング」を考えてみる。

（例）「楽しそうな環境」「やってみたくなる環境」「色々試したくなる環境」「チャレンジしたくなる環境」「不思議（あれ？何かな？）を感じる環境」「いい匂いがする環境」「お友達と一緒にやってみたくなる環境」「ほっこりできる環境」「安心できる環境」など。

- ③ 参加者同士で、写真を交換して、別の視点から別の「環境のネーミング」を考えて、付箋に書いて貼っていく。
 - ④ 20分くらい時間をかけて、互いに感じたことを伝え合う。
 - ⑤ 《研修の振り返り》 写真に「タイトル（ネーミング）」をつけたり、「環境のネーミング」について考えてみたり、意見交換したことで気づいたことや、感じたことは何かについて語り合う。
- (注) グループサイズが大きくなると意見交換などしにくくなるので、グループサイズは4～5人で進めた方がよい。

この手法についてはのべ5回以上実施したが、保育環境の読み取りについては、子どもが写っているか、写っていないかで読み取りやすさが違ってくる。保育は環境を通して行うことが基本であり、子どもの主体的・自発的な活動を促すための環境構成などが求められるが、保育環境が子どもにとってどういう意味を持つのかについて考えを深めるような研修は多くはないようである。しかしながら、写真を使って、「環境のネーミング」を考えることによって、その意味を探りやすくなるので、意識しやすくなるという意見も複数ある。

6. 園内研修の手法6一次への保育の構想に活かす

手法5では「保育環境の持つ意味」について考えるものであったが、さらに次のようなことを考えると、その後の保育の構想に活かすことにつながる。

今後に向けて、「保育環境」の視点から、どうしていくとよいかを考える。

〈考えるポイント〉「もっと／より／さらに継続しながら・・・になるような保育環境」というように、「もっと／より／さらに継続しながら」の視点から考えてみる。

(例) 「楽しそうな環境」→「もっと楽しそうな環境」になるためにはどうしたらよいか？

「色々試したくなる環境」→「さらに色々試すことが継続していく環境」になるためにはどうしたらよいか？

環境を通して行うことが保育の基本であるが、その保育環境を考えるにあたって、今の子どもの様子の読み取りから、「もっと」「さらに」などの視点から考えると、その遊びや活動の継続性・発展性を捉えた環境構成につながる。

Ⅳ おわりに

1. 写真を使った園内研修について

前述してきた園内研修の手法の段階を整理すると、図3となる。

図3のSTEP 1～5のように写真を活用した園内研修では、「自身の保育を語る」「子どもの内面の読み取りを深める」「5領域と結びつける」「保育環境の持つ意味を考える」「次への保育の構想に活かす」などの視点を深めていくことが可能である。しかしながら、その写真は、どのような写真でもよいというわけではなく、保育者が「どのような視点やどのようなことを知りたいと思って写真を撮影し、写真をセレクトして研修に参加するか」によって、写真の活かし方は変わってくる。

2014年度に毎月1回継続的に1年間園内研修でお伺いし、STEPを追って、手法1～6のすべてを実施した園は私立幼稚園1か所・私立保育所3か所である。その研修を受けた実際の感想として「園内研修そのものが活性化し、参加者の気づきや学びが参加者間で共有され、多様な視点を得ることができる」「保育中に写真を撮るタイミングやアングルなどは難しいが、何を視点に保育場面の写真を撮るか、研修前にどの写真を選ぶかといった深まりが個々の保育者に見られる」「園内研修で写真を使って語るので語りやすく、他のクラスの様子もよくわかる」「保育環境の見直しにもつながる」などの声が出てくるなどの写真を使う利点が得られた。

そこで、保育者が保育中に写真を撮って、定期的にこのような園内研修を重ねることの意味を考えると、図4のような「視点の深まりサイクル」になる。

このように写真を使った園内研修をAL型研修として行うことで、「子どもを見る目」「保育環境を捉える視点」を個々の保育者の資質向上につなぐことができる可能性があることがわかった。また、それだけではなく、園内研修の参加者同士で、意見交換することにより、ある場面を1つの見方で捉えるだけでなく、複数の視点で捉えることができることもわかった。

このような写真を使った園内研修は、前述の岡だけではなく、「PEMQ（保育環境の質を写真によって評価していく方法）」という手法が確立されつつある。上田(2013)⁷⁾によるとPEMQとは「Photo Evaluation Method of Quality」のことであり、「保育環境を写真に撮ることで、どのようなものが用意され、使われているのかをじっくり観察できる」「限定的な構図であっても（だからこそ）、そこに込められた保育者の意図やねらいを読み取ることができる」「環境構成という静的なものを対象とすることで、環境構成に込められた安定的な保育者の意図を捉える」こ

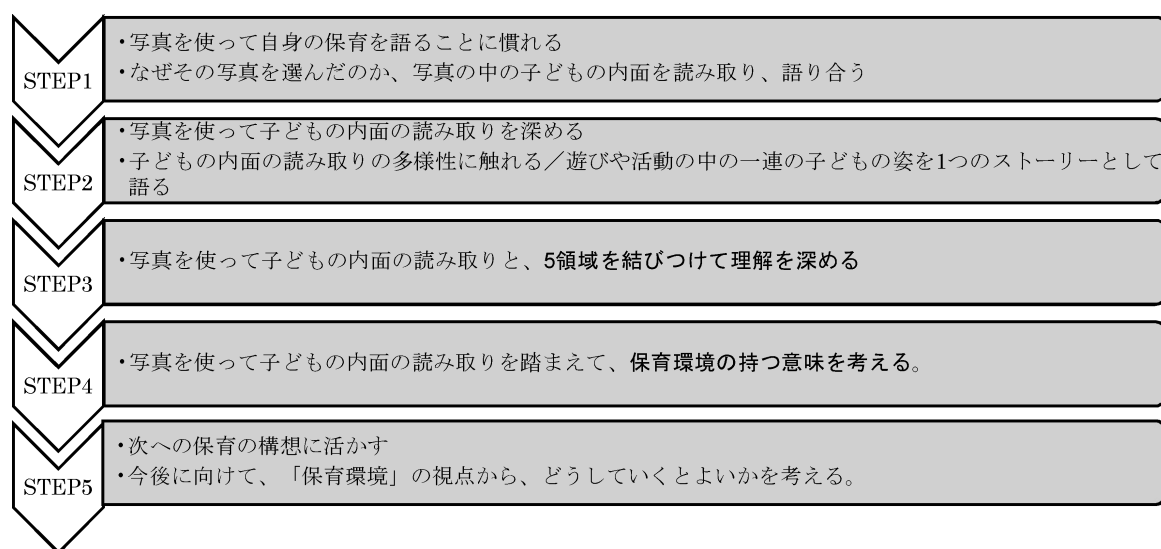


図3 写真を活用した園内研修の段階

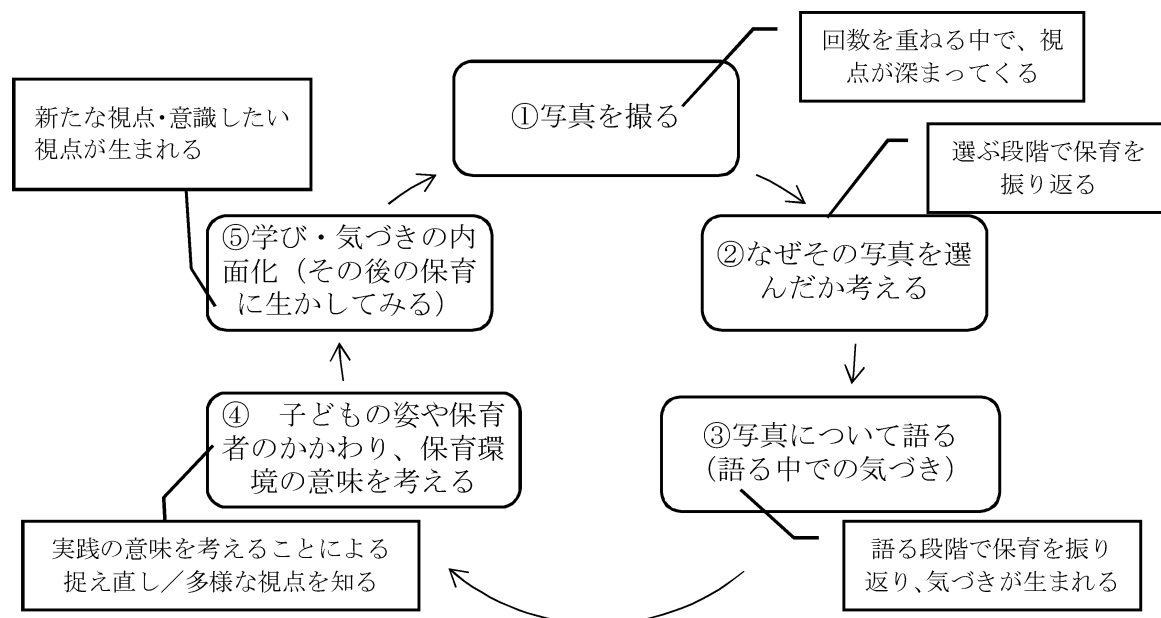


図4 写真を活用した園内研修による視点の深まりサイクル

とができるという。

筆者が提案している方法は、どちらかというとその後の保育に活かすという点でPEMQとは若干違う点もあるが、そもそも保育環境の持つ意味を捉えるのに、エピソード記録などの文字情報や園内環境図型記録の手法だけではなく、写真を活用するという点ではPEMQと同じような発想だと考えられる。

2. アクティブ・ラーニング型の園内研修について

前述してきたように、子どもの様子や保育環境の写真を単に園の記録として残すだけではなく、そのような写

真を使ってグループ・ディスカッション、グループ・ワークなどの要素を取り入れた園内研修をすることにより、「子どもを見る視点や保育環境を捉える視点について主体的・能動的な学びや気づき」が生まれる可能性があることがわかった。

アクティブ・ラーニング型園内研修では、単に「園の職員の主体的・能動的な学びや気づき」を促すだけでなく、「職員同士の協同的な学びや気づきを促す」ことが求められるが、「考えたことを発表しあう」「感じたことを伝え合う」「振り返りを行う」というプロセスを組み込むことによって、「学び・気づきの内面化」につながると考

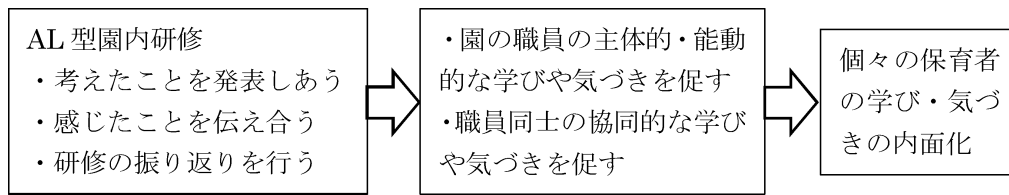


図5 AL型園内研修による学びや気づきの内面化

えられる（図5）。

このように、園内研修で写真を使うことによって、事例やエピソードを書く時間があまり取れない園であっても、保育の振り返りや子ども理解など専門性の向上に欠かせないプロセスを研修の中に組み込むことの可能性や手法を提案することができたと思われる。

しかしながら、今回提案した手法は、まだ現在進行中の部分もあるため、改善や検討の余地は多々あると考えられる。そのため、今後、さらに現場の意見を踏まえつつ、筆者自身が園内研修のあり方を振り返り、より定式化したものとしていきたい。

注

- 1) 中央教育審議会（2012）「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」の用語集より
- 2) 中央教育審議会教員養成部会（2015）「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について（中間まとめ）」より
- 3) 写真を使った園内研修においては、たとえば、川内松男（2012）『保護者とつながる保育の写真活用法』ひとなる書房などの本で紹介されていたり、2015年度の月刊保育雑誌「保育とカリキュラム」（ひかりのくに）において、秋田喜代美による「写真を用いた園内研修」が毎月連載されている（毎号、裏表紙の裏側ページ）。その第1回目（4月号）では、「研究保育での撮影と共有」というテーマのものと「写真を園内研修に生かすよさ」「見える化の大切さ」「写真を

使った研修のすすめ」が示されている。第2回目（5月号）では、「環境構成の写真」をテーマにしている。また、秋田らは「PEMQ（保育環境の質を写真によって評価していく方法）」なども提案し、共同研究でその効果などについても研究を進めている。

- 4) Benesse 次世代育成研究所『これからの幼児教育』（2013 春号）p.4
- 5) 同上 pp.6-7
- 6) 「アクティブ・ラーニング型園内研修」は、明確に定義されているものがあるわけではないが、本文2ページ目に筆者の試論的定義づけを示している。
- 7) 上田敏文（2013）「保育環境の中に見る保育者の専門性」『発達』2013spring、ミネルヴァ書房、pp.28-33

文献

- Benesse 次世代育成研究所『これからの幼児教育』（2013 春号）
 秋田喜代美（2015）「写真を用いた園内研修（連載）」、月刊誌「保育とカリキュラム」ひかりのくに
 上田敏文（2013）「保育環境の中に見る保育者の専門性」、『発達』2013spring、ミネルヴァ書房
 川内松男（2012）『保護者とつながる保育の写真活用法』ひとなる書房
 中央教育審議会（2012）「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」
 中央教育審議会教員養成部会（2015）「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について（中間まとめ）」

Methods for In-School Teachers' Development in Early Childhood Education and Care Using Photographs of the Classes

Koji Takigawa

Osaka University of Comprehensive Children Education

The objective of this research paper is to use photographs of children in classroom settings and other educational environments to refine training method, and to propose Active Learning style (AL style) training using photographs to review lessons and conduct intra-school training sessions.

By using photographs of the classes of training session participants, the participants actively realize and learn things while reviewing their own lessons, not only furthering the children's understanding and the understanding of the educational environment but also showing the variety of ways a particular situation can be perceived by drawing observations and insights out of the cooperation of staff members.